よむ・きく・はなす

聖書を読もう

■教会学校月間■

■聖書を「物語」として読む

現在『聖書教育』誌では、「聖書を物語として読んでみよう」という企画を進めています。

「物語」と聞くと、「聖書はつくり話ではない！」と反応される方があるかもしれませんが、そういう意味ではないのです。聖書を「物語」として読むとは、「物語」のすぐれた特性を生かして、聖書を「神さまの働かれたドラマとして読もう」ということです。

もし、キリスト教的な倫理道徳や「教理」を汲み取る目的だけで聖書を開くならば、聖書を「物語」として読むという感覚からは、少し遠くなります。たとえば、理屈ではなかなか説明できず、聞く側も論理的に納得できたわけではないけれども、その話全体から伝わってくるものを胸にあたためながら、何か深い、心に訴えかける真実が明らかになってくる、という体験はないでしょうか？映画でも小説でも、そういう体験をするはずです。「物語」は、論理的に説明して納得させるよりも、想像力によってまるごと受け止めることでわかろうとする、という感覚を大事にするのです。聖書も、そんなふうに「物語」として読む。そして、神さまが活躍されたドラ

マから、自分へのメッセージとして響いてくる言葉を汲み取るのです。

聖書は、自分の生活の中で自分の生活の物語と響き合うようなしかたで、歴史を通じて伝えられてきた物語だと言ってよいでしょう。だから、各人の様々な体験を通じて、その経験が重なり合うようにして解釈され、「もう一度読みなおされる」ことが必要になります。しかも、自分一人でそれをするのではなくて、教会の仲間と一緒に輪を作って、お互いの体験を紹介し合って、証しを分かち合いながら、物語の意味を理解していく。自分のものにしていく。互いに話し合う中で浮き上がってきた言葉を、「神さまのメッセージ」として受け取るのです。

■イエスの居る風景としての教会学校へ

ガリラヤの湖畔で、生きることの厳しさをいやというほど味わい知っていた群集は、それでもイエスさまが語る「物語」に目を輝かせて聞き入ったのではないでしょうか。そして、明日を見出す励ましを得て、神さまの愛の慰めにふれたのではなかったでしょうか。

そのときのイエスさまの「語り」は、宗教的な善悪の

価値観を解説してみせたり、守るべき訓戒を紹介して、それを暗記させたりするようなものではなかったでしょう。今そこで聞いている人それぞれが、自分を物語の主人公にしてみたり、自分の思い出を重ねたりしながら、その物語に共感して、泣いたり、笑ったり、手をたたいて喜んだり、「とんでもない！」などと声を出して本気で怒ったりしたことでしょう。まさに、「イエスの居る風景」です。そして、その言葉に触れながら、各々が「よし、明日も生きてみよう！」と決心する。これこそが、「物語」の力です。教会学校が、そんな風景が再現される場になることを期待します。（西日本教会学校奉仕者研修会　講演より）

対話しながら聖書を読んで学び合う時間
「共同学習」する場としての教会学校
豊かなクラスを作るのは…あなた、です
教会学校へのご参加をお待ちしています

発行：2013 年 7 月 31 日　日本バプテスト連盟宣教部教会教育室　榎本譲